

Y7-6

当院緩和ケアセンターにおけるボランティア活動の現状と今後の課題

名古屋第一赤十字病院 緩和ケアセンター
○平野 美枝子

【はじめに】当院の緩和ケアセンターは2006年3月4日に全室個室25床で開設した。ボランティアは、現在までに26名が登録した。活動内容と患者・家族の反応、そして今後の課題について報告する。

【主な活動内容と患者・家族の反応】1. 音楽演奏ボランティア：月2回、食堂で20分程度のギター演奏で、リクエストにも対応した。1回に数名から20名程度の参加があった。2. 音楽療法士のボランティア：月2回、音楽演奏を希望する患者・家族の病室に訪問し、希望した曲をキーボードで演奏する。前日に希望する曲をボランティアに伝え準備してもらう。希望者の26.3%は2回以上希望していた。一緒に口ずさんだり、昔を思い出し涙される場面もあった。3. 傾聴ボランティア：毎週木曜日と金曜日。話し相手を希望する患者の病室に訪問する。「気分転換になった」「よく話を聞いてくれよかった」と来てもらえて良かったという反応があった一方、「疲れを感じた」という反応もあった。4. アロマトリートメントボランティア：毎週木曜日。1名から6名の患者・家族が受けており、「香りがよかった」「気持ちよかった」とリラックスできていた。5. お茶会ボランティア：毎週水曜日。お茶のサービスを希望する患者・家族に食堂または病室で提供する。食堂に患者・家族が集まり話しをしたことをきっかけに、顔見知りとなっていた。

【今後について】現在登録しているボランティアは、活動日や時間がまちまちで他のボランティアと関わる機会がない。また、看護師とはその日の依頼内容や患者の情報について、言葉を交わす程度の関わりしか持っていない現状である。今後は、ボランティアが他の医療チームメンバーと十分に共有する時間を持てるようにしていきたい。

Y7-7

終末期がん患者のDNRについて—急性期病棟看護師からのアンケート調査より

前橋赤十字病院 4号病棟¹⁾、
かんわ支援チーム²⁾

○佐藤 和也¹⁾、田中 俊行²⁾、岡野 幸子²⁾、
鈴木 雅美^{1,2)}、高橋 結花^{1,2)}、金子 京子¹⁾、
清水 政子^{1,2)}、小保方 馨²⁾、須藤 弥生²⁾、
土屋 道代²⁾

【目的】急性期病院である当院病棟看護師を対象にDNRに対する考え方を調査し、終末期がん患者に対する看護ケアを考察した。

【アンケート内容と方法】DNRの指示の有無で症例を設定し、看護師の気持ちや接し方の変化をVASで評価した。中心(0ポイント)を「いままでと変わらない」とし、中心から左側(～-5)を「消極的(無関心)な変化」、右側(～+5)を「積極的(感情的)な変化」とした。

【結果】回収率70%で259部から検討した。回収した病棟看護師のアンケートより、91%がDNRの言葉を知っていた。看護師の「気持ち」「接し方」「家族への接し方」の変化は、DNRの指示のある症例設定でそれぞれ+0.1、0、+0.5ポイントであったのに対し、DNRの指示のない症例設定ではそれぞれ+0.9、+0.9、+1.1ポイントであった(p<0.01)。

【考察】DNRの指示がある症例とない症例の患者への気持ち、接し方、家族への接し方を比べると、どちらのポイントもVASで積極的な方向にシフトした。また、DNRの指示のある患者への考え方や気持ちの変化は、指示のない患者に比べポイントが低かった。終末期医療は日々の状態が変化している患者と家族に対し更なるケアが必要となるが、DNRの指示があることによって従来と変わらない看護ケアのみとなっているのではないかと考えた。

【結語】医療者は、「患者にとってのDNR」の指示となるよう患者家族との関わりを再度見つめ直し、DNRについての知識を深め、終末期医療の看護ケアの質を高めていくことが重要である。